

1920年代の『改造』における対「中国」言説

The Statement on 'China' in the Magazine Kaizo Published in the 1920s

許 丹 青

XU, Danqing

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第45号 2018年3月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.45 2018

1920年代の『改造』における対「中国」言説 The Statement on 'China' in the Magazine Kaizo Published in the 1920s

許 丹青 XU Danqing

一、はじめに

19世紀末から、中国の知識人たちは自国の衰弱の原因を分析し、国の振興を図るために、それらを生み出した西洋文明に学ぶ努力を積み重ね続けていた。特に1919年の五四運動以降、梁啓超をはじめ、中国の知識人たちは、積極的に西洋の思想家を中国に紹介した。1920年にイギリスの哲学者、論理学者、数学者であり、同時に社会批評家、政治活動家であるバートランド・ラッセルが梁啓超の招きに応じて、中国で学術講演を行ったのもその一つの表れであった。そのバートランド・ラッセルは、同時に、社会運動が華やかな日本においてもすでにとても魅力的な人物として知られていて¹、帰国途中に改造社の社長山本実彦の招聘により、日本で訪問講演をした。ラッセルが来日する前に、日本のメディアはラッセルに関する宣伝を繰り返していた。1920年12月5日の『大阪毎日新聞』は、ラッセルの「支那の第一印象」を掲載し、その冒頭において、『バートランド・ラッセル』の名は今や新文化、新思想に憧憬する隣邦の若き人々に種々の響きを與へて居る」という解説を加えている。さらには、ラッセルが中国を訪れたことについてだけではなく、新旧二つの勢力が対立している中国の現状について、当時の日本のジャーナリズムが関心を持っていたことも重要である。そして、その二つの関心は、1921年3月から7月にかけて、芥川龍之介が大阪毎日新聞社の特派員として中国に派遣されることにも繋がってゆく。1921年3月31日に「支那印象記 新人の眼に映じた新しき支那 近日の紙上より掲載の筈」のタイトルで、掲載された予告記事からは、その派遣の理由が上記の二つの関心に基づくものであったことを知る事ができる。

支那は世界の謎として最も興味の深い國である。舊き支那が老樹の如く横はつて居る側に、新しき支那は嫩草の如く伸びんとして居る。政治、風俗、思想、有ゆる方面に支那固有の文化が、新世界の夫と相交錯する所に支那の興味はある。新人ラッセル氏やデユウイ教授の現に支那にあるのも、またベルグソン教授の遠からず海を越えて来ようとするのも、やがて此の點に心を牽かるゝに外ならぬ、吾が社はこゝに見る所あり、近日の紙上より芥川龍之介氏の『支那

¹ 1920年から1922にかけて、『読売新聞』、『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』など日本の主流新聞にバートランド・ラッセルに関する記事がしばしば掲載された。例えば、1920年11月10日から11月16日にかけて、『読売新聞』に長谷川如是閑の「ラッセルの社会指導と支那」の(1)から(7)が連載された。

印象記』を掲載する。芥川氏は現代文壇の第一人者、新興文藝の代表的作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦世間に知られて居る。氏は今筆を載せて上海に在り、江南一帶の花を狩り盡した後は、やがて春をもとめて北京に上るべく、行々想を自然の風物に寄せると共に、交りを彼の土の新人に結び、努めて若き支那の面目を観察しようとして居る。新人の観たる支那が、如何に新様と新意に饒なるものであるかは唯本篇に依つてのみ見られよう。

この記事には、別種の観点から注目されてきた「表現」がある。それは、中国について「新しき支那」、「若き支那」と言い表している点である。では、実際に芥川によって、この「新しき支那」、「若き支那」がどのように語られたのか。「江南遊記」（1922年1月1日から2月13日まで『大阪毎日新聞』に連載）は、芥川が杭州・蘇州・揚州・南京に遊んだ記録である。その中の「上海遊記」（1921年8月17日から9月12日まで『大阪毎日新聞』に連載）には、「若き支那」の代表者として李人傑を取り上げ、「李氏は年未二十八歳、信條よりすれば社會主義者、上海に於ける「若き支那」を代表すべき一人なり」とも述べている。そして北京訪問を記述する「北京日記抄」（1925年6月号の『改造』に掲載）のなかに、辜鴻銘との会見を記述した際、²辜鴻銘について「されどヤング・チャイニイズと異なり、西洋の文明を買ひ冠らず」と述べ、「ヤング・チャイニイズ」という言葉を用いて、西洋の文明について多くのことを学ぼうとする「新人」と帝制を擁護する辜の異なるところについて言及している。こうした「新しき支那」、「若き支那」についてはすでにいくつかの先行研究が取り上げている。例えば、単援朝は（「芥川龍之介研究—中国文学との関わりを中心に」筑波大学大学院文芸・言語研究科学位論文、1991年10月）1974年筑摩書房版の『芥川龍之介全集』における「若き支那」に対する解釈から出発し、李人傑と「少年中国学会」（英語名THE YOUNG CHINA ASSOCIATION）の関わりについて考察している。³そこで、単援朝は李人傑が「少年中国学会」とは関係がなく、むしろ「共産党を「代表すべき一人」といったほうが真実である」と主張、芥川が李人傑に対して「若き支那」と称する理由は「表現上の習慣性や読者層への配慮」と「検閲対策のひとつ」だと結論づけている。また、王書瑋は（「『上海遊記』の「徐家匯」—キリスト教受容史に芥川の見出した「近代」、『千葉大学社会文化科学研究科プロジェクト報告書』（102）2005年3月）「上海遊記」の「徐家匯」に触れ、大阪毎日新聞社の予告記事を踏まえながら、「徐家

² 実際に、1921年8月1日の『日華公論』に掲載された「新芸術家の眼に映じた支那の印象」に書いているように、辜鴻銘のほか、芥川は北京で、胡適と高一涵にも会った。この二人の文章は本稿第六節で論述する『改造』の特集号「現代支那号」に掲載されている。特に、胡適についてラッセルは『The Problem of China』（London, Allen & Unwin, 1922）に「ヤング・チャイナ」の代表者として取り上げている。

³ 「若き支那」について、筑摩書房版の『芥川龍之介全集』（1974年6月）は「Young Chinaと内外から呼ばれた中国の新勢力」と解釈している。また、岩波書店版の『芥川龍之介全集』（1996年6月）は「中国の若い知識人、学生を中心とした五・四運動当時の文化学術団体「少年中国学会」の英語名「Young China」（THE YOUNG CHINA ASSOCIATION）を念頭に置く表現」と解釈している。

匯」の創作目的を「若き支那の面目として描いた」と推測している。そして、周芷冰（芥川龍之介「上海遊記論：「私」が見た「新しい」上海」『人文論究』、2016年5月）は芥川が見出そうとするのは「革命の胎動をも強く感じられる、動きつつある」、新しい上海だったと結論づけている。

芥川龍之介の遊記に見られる「支那」の表象は芥川の研究者にこれまで繰り返し研究されてきたが、そのひとつである「新しき支那」、「若き支那」についての分析は以上のようにまだ十分になされていないといってもいい状況にある。それを明らかにするためには、改めて芥川龍之介だけではなく、当時の日本のメディア言説におけるそれらの語られ方に注目する必要があるだろう。そこで検討に値するのは芥川の中国訪問のそもそものきっかけとなったラッセルを招いた改造社、山本実彦の存在とその果たした役割である。彼はラッセルの日本講演を企画したのみならず、編集にあっていた主力雑誌『改造』にラッセルの論文を数多く翻訳、掲載してもいたのだが、そのなかに、「新しき支那」、「若き支那」の意味を理解するうえでの重要な情報が見出せるのである。そしてさらにはそうした対中認識が一定程度その後の『改造』に現れ続ける。つまり、「新しき支那」、「若き支那」といった中国を語る際に用いられた「表現」が芥川にのみ結びつけられるのではないという事実も指摘できるのである。芥川という「新しき支那」とはいったい何を指すのか。そして、それはメディア言説としてどのような広がりや意味を持っていたのかを本稿では考察したい。考察に入る前に、まず雑誌『改造』について紹介しておきたい。

二、雑誌『改造』について

雑誌『改造』（1919年4月から1955年2月まで）は大正末期から昭和30年代にかけて『中央公論』、『太陽』とともに、日本の主要な総合雑誌であった。1919年ごろの日本は「社会運動や労働運動に漸々目が開けそめた」⁴ 時期であった。このような世相のなかで、雑誌の名を『改造』とし、編集方針としては、「現在許されている社会政策の線に添うこと」⁵とした。創刊号は巻頭に社説「帝國の主導的講和條件」などを並べ、第一次世界大戦後の思想・経済についてふれるものであったが、第四号からは編集方向を転換し、「労働問題社会主義批判号」と銘打って、編集視点を「労働者階級に向けはじめ」⁶ることになった。

同時に、『改造』は数少なからぬ中国に関する文章を掲載し続けた。創刊号では巻頭の社説「帝國の主導的講和条件」でも、中国政府、日本の対中国政策などにふれている。当時、パリ講和会議により、中国は新しい国内問題及び国際環境に直面していた。『改造』が中国に関する記事を載せ

⁴ 山本実彦「十五年」『出版人の遺文 改造社山本実彦』栗田書店1969年2月。初出は『改造』（1920年4月号、改造社）。この文章は『改造』が創刊十五年の時に同誌に掲載されたもの。

⁵ 関東果『雑誌『改造』の四十年』光和堂1977年5月、P35。

⁶ 前掲書、P45。

始めた時期は、ちょうどそのパリ講和会議の直後に当たっている⁷。また、1920年代の中国においては、軍閥と列強の圧迫に対抗する動きが強まっており、それを受ける形で、『改造』は中国の反帝国運動に常に注目する姿勢を取り続けることになった。

『改造』の姿勢を語る時、編輯方針を決定した改造社の創業者である山本実彦のことも言及しないわけにはいかない。出版理念について、彼は「十五年」⁸の中に「私どもは何事をするのでも常に広い視野を一まわり見渡さねばならぬ。日本は日本ばかりで太って行くことができないように、日本ばかりで通用する正義観や、道徳観であってはならぬことだ」と述べているが、その言葉通り、彼は国外の知識人の文章を取り上げ、外国知識人を日本に招聘するとともに、中国への関心を持ち続け、中国に関する文章を掲載し、中国問題をめぐる座談会を開くなどの事業を推進し、また編輯方針を取り続けた。

『改造』の中の中国の関連記事を表現形式から見ると、時評・論文・詩歌・漫画・劇・随筆など多岐にわたる。その結果として、雑誌『改造』は中国に関心を持つ日本の知識人に大きな影響を与える総合雑誌としての機能のみならず、ジャーナリスティックな時局解説の読者への情報提供の点においても重要な役割を果たすことになった。したがって、当時の日本における中国観の形成過程とその実像の解明にあたっては、『改造』は極めて重要なメディアであったといえることができる。

三、ラッセルの見た「ヤング・チャイナ」

1920年に、バートランド・ラッセルは北京大学客員教授として中国に招かれた。第一次世界大戦後、近代以来の西洋の文明に対して疑問を持ち、西洋と違う価値観を求めため、ラッセルは中国に眼を向け⁹、中国に滞在している間に、「現代中国」¹⁰に出会うことになった。

ラッセルが出会った現代中国を早速日本へ紹介するために、1922年4月号の『改造』はラッセルの「支那の國際的地位を論ず」、および同年の8月号に彼の文章「支那文明と西洋」を掲載した。これらの文章でラッセルは観察した中国のことを紹介し、中国の発展を担うのは若い知識人たちであると述べて、中国の未来、そして中国の若い人たちに期待を示していた。そしてラッセルは、欧米で教育を受けて帰国した、あるいは西洋の知識を教える中国国内の大学で西洋の技術や思想を学

⁷ 佐藤綱次郎「講和条約の基本的考察と将来の世界的変局に対する日本の国是」「四、妄想的軍備縮小案をわらって日支の文化運動を高唱す」『改造』1919年6月号。

⁸ 初出は『改造』（1920年4月号、改造社）。この文章は『改造』が創刊十五年の時に同誌に掲載されたもの。

⁹ ラッセルは『The Problem of China』（London, Allen & Unwin, 1922. P20）において、自分が中国に行く目的を述べた。

¹⁰ ラッセルの『The Problem of China』（London, Allen & Unwin, 1922）は、特に一章を設け、「MODERN CHINA」（モダンチャイナ）を紹介した。

んだ若い知識人たちを「ヤング・チャイナ」¹¹と称したのである。

辛亥革命により、中国では共和政府が樹立したが、近代的な政府を実現できず、軍閥割拠の混乱と、列強を中心とする外国勢力干渉と外国資本の脅威にさらされていた。ラッセルのいう「ヤング・チャイナ」とは、そのような環境のなかで、国家や人民のことを憂慮し、中国が当面の危機をのりきって自立することを目指し、民主主義を要求し、国を変える望みを西洋近代の思想、制度に求める一群であった。

中国の政治的独立の達成を求めた「ヤング・チャイナ」に対して、ラッセルは秩序のある政治の確立、中国人の手による産業の開発、教育の普及という三つの重要な条件が必要であると提案している¹²。頑固な排外主義をとらぬ愛国心を身につけ、それを支えとした、自立に成功することによって、新しく強い国になれるはずであるとラッセルは「ヤング・チャイナ」に期待を寄せたのである。そうしたラッセルの思いがどのように日本人の心に響いたのかを次に見てゆくことにしたい。

四、座談会「対支国策討議」に示された中国認識

ラッセルが19世紀の中国と現代中国（モダンチャイナ）を分析し、欧米で教育を受けて帰国し民主主義を希求した若い知識人たちを「ヤング・チャイナ」と称し、これらの若い知識人たちに期待をかけていたことは前節で述べたとおりである。『改造』にはそのラッセルの目を通して中国を観察していた一面がある。その一方で、ラッセルの目を通して中国を観察していた『改造』独自の現代の中国に対するスタンスも当然存在する。そのスタンスを代表するのが本節で取り上げる「対支国策討議」である。1924年10月11日に、辛亥革命以来の中国は「どうなるのであるか」「どうしたらよいのであるか」¹³という日本国内において主流となっていた議論に対して、現在中国は「どんな風に変わりつつあるのか」¹⁴について国民に伝えるため、山本実彦は長谷川如是閑、堀江帰一、吉野

¹¹ 『改造』1922年4月号に掲載されたラッセルの文章「支那の国際的地位を論ず」の中で、若い知識人たちを「青年支那」と呼んでいる。英語ではそれを「Young China (ヤング・チャイナ)」と書いている。「ヤング・チャイナ」という表現はラッセルの『The Problem of China』(London, Allen & Unwin, 1922)の中に出た「Young China」を翻訳したものとは同一のものと見なされている。

¹² Bertrand Arthur William Russell 『The Problem of China』 London, Allen & Unwin, 1922。

¹³ 『改造』1924年11月号、P2。

¹⁴ 前掲書、P2。

作造、永井柳太郎、米田実、福田徳三、小村俊三郎¹⁵等その当時の日本において影響力を有していた人物を集めて、「対支国策討議」を開催した。その内容は、同年11月1日発行の『改造』に掲載された。その掲載理由は「編輯だより」に以下のように示されている。

「我が社が帝國ホテルにて開催せる對支國策討議は、將に我帝國の最高國策を暗示、明示する者であつた。雑談の裡、支那國家の根本を論じ、孫、張、呉、曹を品し、支那の經濟、財政を究め、そして或國の採るべき大國策を討議した近來稀に見る有意義の會合であつた。何にせよ各方面に亘る我國第一流の權威者のみであつたが爲に日比谷議會などに見られぬ壯觀を呈した。その速記録を一讀せば支那に對する根本知識が得られる雑誌新聞界空前の企圖であつた。」¹⁶

1918年に中国の中央政府の政権を担っていたのは安徽派の段祺瑞だが、あまりに日本寄りの政策を展開したために、五四運動の高揚と共にその声望は低下していった。そこに目を付けた曹錕、呉佩孚ら直隸派はイギリス・アメリカの後押しを受けて、奉天派の張作霖と同盟して、1920年7月に安直戦争で段祺瑞率いる安徽派を破り中央政府の政権を手中に収めた。しかし、連立政権を樹立した直隸派と奉天派は結局政府の主導権をめぐる対立し、1922年4月の第一次奉直戦争が起こった。その戦いは直隸派の勝利に終わり、中央政府の実権を握ったが、曹錕の権力欲が露骨になった結果、曹錕に反対した諸派が同盟を結んで対抗し、1924年9月から10月にかけて、第二次奉直戦争が起こることになった。

「対支国策討議」が行われたのは、ちょうどそうした第二次奉直戦争の時期であった。討議は当時中国の三大軍閥の争いを分析し、さらに広東省の孫文の勢力と軍閥を批判する一方で、大学生、商工業者、労働者を含む、革命の思想を強く持つ新しい勢力の存在に言及するものになったのである。

当時日本では中国における軍閥勢力を巡って干渉・不干渉の意見がさまざまに入り乱れており、干渉論に関しては、日本の利益を維持するために、張作霖を援助するものと、直隸派と反直隸派の争いに干渉するものの二つが主流となっていた。討議ではこの二つの干渉論を批判している。

¹⁵ 長谷川如是閑は近代日本を代表するジャーナリスト、思想家であり、一貫して自由主義の立場からファシズム批判活動を展開した。堀江帰一は明治・昭和時代前期の経済学者である。吉野作造は中国通であり、1906年に袁世凱の長男克定の家庭教師として天津に赴任し、翌年天津の北洋法政学堂の教習を兼任し、のちの中国共産党の指導者李大釗らを教えた。永井柳太郎は大正・昭和時代前期の政治家である。米田実は明治・昭和時代の新聞記者、外交史家である。1908年東京朝日新聞に入り、外報部長、論説部長をつとめ、そのかわり東京商大（現一橋大）などで外交史を教えた。福田徳三は明治・昭和時代前期の経済学者である1918年吉野作造らと黎明会を結成した。小村俊三郎は明治・昭和時代前期の外交官、ジャーナリストである。1897年北京に留学し、中国語をおさめる。青木宣純の秘書官や一等通訳官などをつとめ、日中外交につくした。退官後、「東京朝日新聞」などの論説委員となった。

¹⁶ 『改造』1924年11月号の「編輯だより」。

小村は積極的なかたちで意見を述べ、具体的に言えば、彼は中国における平和統一を望んでいる民衆の立場から、軍閥対立の状態による苦しい生活を強いられていた民衆に対して深く同情した。しかも「同情と援助と乃至干渉といふのは、是れは非常にその間に差別があります。又援助と干渉は、或る点に於ては差別がなくて殆ど同様なものになる。だから同情の範囲を超えて干渉は勿論援助と雖も決して為すべきものぢない」¹⁷と主張した。

一方、張作霖を援助する干渉論に対しては、米田は「日本が張作霖に奉天を維持させることにすると、日本が是こそ支那の主権を蹂躪することになる」¹⁸と批判した。彼は中国の主権を認め、「満洲は日本の領土でもなし、矢張り支那の一部であつて見ると支那の主権の下にある」¹⁹と主張した。

さらに、軍閥を攻撃し、大学生、商工業者、労働者を含む、革命の思想を強く持っていた新しい勢力の存在を提示した永井は、この新興勢力が率いた運動に対して、「社會革命」²⁰であると同時に、「革命運動」²¹であると認め、「今日でも相當に著しく起つて居るが、将来は更に大きく發達し得る見みがある」²²と、期待を寄せていた。特に、永井は「大學生を中心としてヤング・チャイニス」²³の運動を取り上げ、「ヤング・チャイニスの間に於ける自覺性は相當に大きく見るべきものだ」²⁴と主張し、中国の若い世代が中国の革命運動を推進する役割を認めた²⁵。永井は民族の自覺的な運動が存在することをはっきり認めると同時に、中国の若い世代に期待を寄せた。

最後に日本が中国からすでに得た利益の話題に触れた際、「宋讓の仁」²⁶の例えを用い、日本だけがそれを棄ててはいけないという一致した見解の存在から、この討議は結局日本の国益から中国の問題を見ているものであったことが分かる。一方で、永井の見解に代表される中国の新興勢力「ヤング・チャイナ」に対してラッセルのそれより客観的な、そしてより現状認識的に的確な理解を示した『改造』の特徴ある着眼点も指摘することができる。

ラッセルが語る「ヤング・チャイナ」の潜在力を重んじる文章を掲載して、また、中国の現状を分析するに当たって「ヤング・チャイナ」の存在に論及したこと、そして「ヤング・チャイナ」の

¹⁷ 前掲書、P7。

¹⁸ 前掲書、P13。

¹⁹ 前掲書、P13。

²⁰ 前掲書、P28。

²¹ 前掲書、P28。

²² 前掲書、P30。

²³ 前掲書、P29。

²⁴ 前掲書、P31。

²⁵ 1919年に中国で五四運動が起った際に、日本の新聞メディアにおける五四運動について、学生たちが「煽動」されたという説があった（『北京学生狂態』、『東京朝日新聞』1919年12月12日・「支那の排日運動其根柢的原因」、『東京朝日新聞』1919年12月19日）が、永井の中国の学生たちが率いた運動に対する評価は、「煽動」の説と違って、大学生たちの自覺性を認めている。

²⁶ 中国春秋時代に、宋と楚との戦いの際、宋の公子目夷が楚の布陣しないうちに攻撃しようと進言したが、襄公は君子は人の困っているときに苦しめてはいけないとあって攻めず、楚に敗れたという「左氏伝（僖公二二年）」の故事による。

可能性を認めたことは当時の日本の言論界における対中認識において『改造』が一定の客観性、中立性と独自性を有していたことを示している。

五、五・三〇運動への注目

1925年5月に、上海にあった日本人経営の在華紡の工場でのストライキ中に、日本人監督が中国人組合指導者の一人を射殺した。上海では学生らを中心として演説などの抗議活動をおこなったが、多数が逮捕され、さらに5月30日に工部局のイギリス・フランス治安維持部隊によってストライキ中の労働者が殺害、逮捕されるに至り、それを機に上海と青島にあった30ほどの在華紡の工場にストライキが広がった。これがいわゆる五・三〇運動で、現在ではこの運動は現代中国における代表的社会運動として知られている。『改造』1925年7月号の巻頭言は、早速「支那新人の新支那運動」というタイトルで五・三〇運動に触れた。「支那の人々が、特に支那の學生團が事あるごとに国権の回復、不平等條約の撤廢を高唱するのは、情理よりして當然のことで、我々も彼等の意中に同感を禁じ得ぬものがある」というのが『改造』の評価であったが、そこには中国の若い世代に同情するとともに、その存在を重視する姿勢が見られる。ここにも「ヤング・チャイナ」への注目に連なる『改造』の独自の対中国観を読み取ることができるだろう。

六、「現代支那号」に書かれた「現代中国」

1926年7月号に、『改造』は「日本は軍閥官僚の支那を知つて民衆支那を知らない。孔孟、四書五經の古典支那を知つてヤングチャイナーの白熱せる民衆文化を知らない。故に若き中國人曰く『日本人支那を知らず』と、茫々三千年の傳統文化を塵芥の如く一擲して猛然新支那建設に必死の苦闘を捧ぐる悲壯にして眞摯なる若者支那の運動は實に世界的の驚異であらねばならぬ」²⁷という目的で、同年同月に増刊号「現代支那号」²⁸を計画した。²⁹そこでは複数の中国人の言説を掲載する形で主に二つの方面から新しい中国と古い中国を比較している。一つは中国の新しい面目であり、一つは新しい中国を支える新興勢力である。新興勢力に関しては、主に学生運動、国民党、独立青年党、共

²⁷ 『改造』1926年7月号に載せられた「現代支那号」の広告。

²⁸ 「現代支那号」の目次から（後掲の付録を参照）明らかのように、「現代支那号」には胡適、李人傑など知識人が書いた現代中国の政治、社会運動を紹介する文章が載せられたほか、郭沫若、徐志摩、村松梢風、佐藤春夫など日中両国の作家たちが創作した現代中国に関する文学作品も掲載された。同号の「編集後記」に「文壇論壇の交歓は本誌の計画」と述べたように、前節で紹介した座談会と同じく、現在中国では「どんな風に変わりつつあるのか」について読者に伝え続け、同時に中国の現代文学を日本の読者に紹介した。ここに、『改造』の中国現代文学の普及、促進という役割も窺えるだろう。

²⁹ 筆者はかつて修士論文『岩波茂雄と中国—日中文化交流における彼の功績と限界について』（岡山大学、2013年）の中で、1920年代において岩波書店の創業者である岩波茂雄が中国に対するイメージを修正するために、改造社が現代中国を日本の読者に紹介するという方法とは異なり、「岩波文庫」のシリーズで中国の古典作品を紹介し、古典中国を日本の読者に紹介するという方法を用いたことを分析した。この二つの方法は日本の出版メディアにおける当時の中国に対する代表的な二つの立ち向かい方だと言える。

産党を論じている。

中国の学生運動は、五四運動から世界に知られ始めたと言ってもよいが、彼らの運動は次第に中国の改革の道を模索するものへと変わっていった。高一涵³⁰は「中國の學生運動」で、学生運動が先頭に立って改革を推進するという役割を強調した。高一涵はまず中国の歴史の視点から、学生運動が先頭に立つ伝統的基盤を論じた。彼は中国の古代の学校は「民意の發表の機關」とする特徴を強調し、従来中国の学生たちは政府を監督するという役割を提示し、加えて「國內に在つて民衆を喚醒する出版物の、學校學生の主幹するもの、亦多いこと胡蝶の紛飛するが如くである」という状況から、学生たちが引き起こした運動の一つの特徴は知識を重んずることであると述べた。そのうえで、高一涵は「中國の學生運動は、列強の壓迫に對して正當防衛の運動を爲すもので、政府の野心を助成して、他國の土地を兼併したり、他國の權利を侵犯したりする運動ではない」だと強調した。

また、国民党、広東政府に関する文章については、満鉄天津事務所所長の伊藤武雄の文章「北京政府と廣東政府」が載った。伊藤武雄は中国の南方において近代国家を作るために必要となる自由な精神があると強調しながら、国民党、国民政府が持つ中国の革命運動における二つの重要な地位を論じた。一つは「近代國家組織運動の本營なる」ことであり、もう一つは「支那改造の大本營たる」ことである。中国において、最初に帝制の覆滅、共和制の創建に貢献したのは、孫文を中心とする一派である。その後、三民主義を提唱した国民党が生まれた。国民党は当時中国における最有力な革命政党であると言え、また中国を統一する理想に最も近く歩み寄っている政党だと期待されていたと考えられる。

一方、『改造』には独立青年党の一員である林駢³¹の「新支那の青年運動と日本の立場」が載せられ、その中で林駢は共産党と国民党の欠点を指摘しながら、新青年団体は新しい中国を建設する重大な責任を担っていると述べて、独立青年党の将来性を強調した。

中国の労働運動も五四運動以降において始まったと一般には考えられている。「現代支那号」に載る「中國無産階級及びその運動の特質」は、はなはだ興味深いことに、芥川がかつて「若き支那」の代表と紹介した李人傑の手によるものである。そして、李人傑は中国共産党の創立メンバーの一人であった。この文章の中で李は中国の革命現状を分析し、中国無産階級の運動とは「民族的外衣によつて社會の同情を集め、以てその運動の發達を速かならしめ、且つ學生を呼んで社會主義的精神を教へ、また社會主義的原則を教はれて、以てその運動を促進する」ことを目指すものであると

³⁰ 高一涵は中国の政治学者、ジャーナリストである。日本に留学したことがあり、明治大学政治科で学んだ。寄稿した時、北京大学教授に任じていた。

³¹ 林駢：林植夫、「孤軍派」の一員である。「孤軍派」とは、雑誌『孤軍』を機関誌として、国家主義の精神に基づく組織である。多くの「孤軍派」のメンバーは後ほど中国青年党のメンバーになったことから考えると、「独立青年党」とは中国青年党の異称である可能性がある。

述べて、その学生運動との繋がりを強調した。

これらの人の言説を『改造』が載せた点には、中国の各新興勢力を目の当たりにし、バランスを取りながら、日本の読者に紹介しようとしたその姿勢を読み取ることができる。そして、それら言説の多くが、まさに「ヤング・チャイナ」によって書かれたものであったことを考えると、重層化する形で、当時の『改造』が「ヤング・チャイナ」に対する期待を示していた点を指摘することができるだろう。

七、国民党に対する期待感

1925年に孫文が亡くなり、その後国民革命軍総司令官になる蒋介石が実権を握り、1927年に南京に国民政府が成立した。それを受けてであろうか、『改造』の注目点は国民党に移っていたようである。例えば、1929年4月号の御手洗辰雄が書いた「新支那を觀る」と1931年1月号の室伏高信が書いた「新支那思想とは何か」は主に国民党に目を向けた内容の言説である。

具体的に言うと、御手洗辰雄が見た中国の「新政府」においては「支那流の繁文褥禮はなかなか改まらぬやうであるが、外交部などはそれ程面倒でもない」。軍紀も「表面的にはやゝ引き締めた」。「かつて見られなかつた新しい光景が続々と展開されて来た」と述べて肯定的な評価を下している。

室伏高信は中国において二つに分かれた原則、国民党の三民主義と共産党の共産主義を比較し、三民主義は「王道的理想の傳承」でありながら、「新しい世界に復興し、新しい世界に適應する」という結論に至った。

1920年代後半に入ってから、日本のメディアは中国の国民党に対する関心を高めるようになった。(中央公論社の雑誌『中央公論』にも同じく傾向が見られる。例えば、1927年11月に蒋介石の人物評論が掲載され、1930年8月に室伏高信の「新支那論」が載せられ、中国の国民党のことに触れた。)この時期に、『改造』がこの二人の評価を掲載したのは、当時の言論潮流に順応した行動であったと考えられる。

八、おわりに

これまで考察したように、一定程度まで、1920年代の雑誌『改造』は「ヤング・チャイナ」への関心を持ち続け、中国の新しい様相を目の当たりにして、現代中国を日本の読者に紹介するという重要な役割を果たしていた。それには、古い伝統文化を持っている中国は新しい様に変われるという期待があった。ラッセルを承け継ぐ形で『改造』が取り上げ続けた「ヤング・チャイナ」は、『改造』によってより具体的、現実的に中国の現状と未来に関心をもつ読者に届けられることになった。しかし、やがて「ヤング・チャイナ」は『改造』の言説から姿を消してゆく。1920年代の終わりに至ると、先に見たとおり中国情勢分析に関する着眼点は国民党の存在動向にシフトしてゆく。新興勢力の存在に対する関心から、中国の支配者を国民党と見定めて、統治能力の有無や日本との関係、

政治力学的分析が主要テーマとなってゆくことにその論調の変化は対応したものと予想できるが、30年代に入って間もなく起こる日中関係の大きな転換点との関係も含め、それらに対する分析については、稿を改めることにしたい。また、辛亥革命を経た1920年代は、大正デモクラシー、ロシア革命の影響、いわゆる「支那趣味」の流行等の政治状況、世相に応じて日本人の中国に対する関心が多方面にわたって強まった時期であった。またその時期に形成された中国観は、続く30年代にも当然影響を及ぼしている。本稿は、扱った資料を『改造』に限定して考察を試みた。それゆえ、今後はほかのメディアにも視野を広げ、20年代から30年代にわたって、日本出版文化における中国観がどのように変化していったのかについて考察してゆきたいと考えている。

付録：「現代支那号」目次

「支那と現代」	(巻頭言)
「近代支那西洋文明に対する吾人の態度」	胡適
「中国無産階級及びその運動の特質」	李人傑
「新生支那に於ける女性の地位」	朱胡彬夏
「中国哲学の貢献」	馮友蘭
「中国の学生運動」	高一涵
「中国国家財政と地方財政の区分」	馬寅初
「中国女子の覚醒」	陳望道
「新支那の青年運動と日本の立場」	林駉
「北京政府と広東政府」	伊藤武雄
「在支外人記者の支那観」 「一 現代支那の真相」	ランドル・グールド
「在支外人記者の支那観」 「二 過渡期に於ける支那」	エム・ロウズン
「在支外人記者の支那観」 「三 支那に於ける赤化運動」	布施勝治
「在支外人記者の支那観」 「四 列強対支関係の新紀元」	ダブルユー・エイチ・ドナルド
「支那小説の話」	田中貢太郎
「太原 大同の仏頭」	木村荘八
「漫画 同車」	豊子愷
「謝秀卿」	村松梢風
「漫画 都会的清客」	豊子愷
「支那青年と自然科学」	木下杢太郎
「中国新文学談瑣」	西瑩
「漫画 施茶処」	豊子愷
「支那の寄席」	井上紅梅
「社会雑事」	汪俠公
「苦心孤詣 (旧式支那小説)」	董諤声

「新支那雑俎」	辻聴花
「日本古典文学に就いて」	謝六逸
「留学所感二三—留学生に与ふ」	何為
「漫画 「肅静廻避」 与紅頭巡捕」	豊子愷
「北京問話」	小畑薫良
「支那絵画の派別とその変遷」	鄧以蟄
「民国寄稿家略歴」	
「海のひびき」	徐志摩 佐藤春夫
「春光」	間一多
「三月十八日—大統領府前の大流血を記念して」	饒孟侃
「近詠」	樊山（増祥）
「宣統帝作詩筆影」	
「題宋石門羅漢画像（四首）」	梁啓超
「蘇州の歌謡」	顧頡剛
（創作）「劇曲 圧迫」	丁西林
（創作）「キュラソー」	張資平
（創作）「酒後」	凌叔華
（創作）「王昭君（二幕）」	郭沫若
（創作）「阿蘭の母」	楊振生
（創作）「美しい肉体を見た話」	徐志摩
（創作）「短編三つ」	陶晶孫
（創作）「昼飯の前（一幕）」	田漢
「蘇子瞻米元章」	露伴学人
「剥げた仮面」	正宗白鳥
「大同域内外（雲崗紀行のうち）」	犬養健
「支那の大人物」	長与善郎
「『真生活』ヘール・トライヤスからクロ・ド・キヤアニユ」	武林無想庵
「美術と支那の雑感」	岸田劉生
「明代の通俗短編小説」	塩谷温
「賢くなる法」	里見淳
「返り討」	菊池寛
「支那の国家秩序と社会秩序」	長谷川如是閑
「李鴻章」	佐藤春夫
「蒙古の太陽」	ボリス・ピリニャーク